

お忙しくても、約 2 分間で読めます

山内公認会計士事務所

ハートフル・ワード (心からの言葉)

TEL 098-868-6895

FAX 098-863-1495

経営者への活きた言葉

もはや「仕事」ではなく単なる「労働」(不正の要因) 東 正樹 (日経ビジネス編集長)

1. 「こんな会社になりたい」「社会をこう変えたい」。そういう夢を語る経営者が少なくなっているように感じます。経営実務に長けている人は増えている印象ですが、夢がない。偏差値競争をくぐり抜けたように社内出世競争を勝ち抜き、よいポストに就くことそのものが目的になっているような…。経営者になっても数字を良くすることそのものが目的になっている方も多いのではないのでしょうか。
2. このところ明らかになった品質問題は、現場の社員たちが「悪意」を持って不正を働いているわけではないのが特徴です。不正が実害につながっていないものが多く、だいたい先輩に教えられた通りに働いた結果というものです。しかし、そこには仕事へのこだわりや誇りが感じられません。ただただ会社の利益につながるようにきめられた業務をこなしている。
3. それはもはや「仕事」ではなく単なる「労働」のように見えます。働くことそのものが目的となってしまう。よいポスト就き、数字を上げることだけが目的となっている経営陣と重なって見えます。社員一人ひとりが「労働」から脱却し、夢や誇りを持てる「仕事」を取り戻す。今年には基本に立ち返る年ではないのでしょうか。

(参考:「日経ビジネス」2018年1月8日号)

人事・労務について

人は仕事を通じて自分を磨く

1. 人間から心、道理を取り除いてしまうと、ひと包みの膿と血の袋、大きな骨の塊にしかすぎず、鳥や獣と何ら変わらない。換言すれば、人は志や理想を持って初めて人となる、ということである。志、夢、理想を持つことこそが用を知るための前提といえる。
2. 次に大事なものは、自分の仕事に精いっぱい打ち込むことだ、とは多くの先輩が教えるところである。趣味では人間は磨かれぬ。人は仕事を通してしか自分を磨くことはできない。森信三師の言葉がある。「職業とは人間各自がその生を支えたと共に、さらにこの地上に生を享けたことの意義を実現するために不可避の道である。されば職業即天職観に人々はもっと徹すべきであろう」。心したい言葉である。

(参考:「致知」:2018年3月号)

経営者のための危機管理

企業の不祥事の防止策

中西 宏明 (日立製作所会長)

1. 2017 年は企業の不祥事が相次いだ。企業の不祥事が頻発している理由として、日本はいろんなルールを緻密に作りすぎた面がある。特に自動車の完成検査は長年見直してこなかったため、少し現実離れしている。では、不祥事、コンプライアンスの問題をガバナンスで防げるかというとなかなか難しい。不正を許容するカルチャーができてしまうことが問題だ。
2. 不祥事の防止のために、ガバナンス改革をしているわけではない。客観的な違った視点から経営のあり方への批判や示唆をもらうことが目的である。そういう観点からボード(取締役会)の議論を組み立てていこうとすると、ボードへの提供する情報もがらりと変わってくる。また、社外取締役から株主の視点、市場の期待、お客様の期待といった観点で話してもらうことは業績向上にも寄与していると思っている。

(参考:「週刊東洋経済」2017年12月30日・2018年1月6日号)

古典に学ぶ

小事の処し方

「小事の方になると、悪くすると熟慮せずに決定してしまうことがある。それが甚だよろしくない。小事というくらいであるから、目前に現われたところでは極めて些細なことに見えるので、誰もこれを馬鹿にして念を入れることを忘れるものであるが、この馬鹿にして掛る小事も、積んでは大事となることを忘れてはならぬ」

(参考: 渋沢栄一「論語と算盤」: 国書刊行会)